

---

---

# □ レコード (CD&DVD)

諸石幸生

---

2016年のレコード界は、大きな盛り上がりこそなかったが、CDリリースはほぼ例年並みであり、CD不況が叫ばれる中、レコード各社の奮闘ぶりが見えて来るかのようである。

確かに、交響曲や管弦楽曲、そして、協奏曲などでは旧録音の再リリースが数多く、いわゆる純粋新譜が少ないという状況はあろう。1989年には、カラヤンが亡くなり翌年の1990年には、バーンスタインが他界したことで、巨匠時代は終わった。

だが、それから、四半世紀が経過したのである。新しい才能や新人たちももっと進出し、この世界を賑わせてよい筈であるが、未だにそうした状況には至っておらず、ファンの心理も掴めていない状況である。

ただ、近年の場合ある特定の部門で困った状況が生まれているように思われる。その一例がオペラである。近年オペラ全曲盤のリリースが少なくなっていることは、広く知られていることだが、2016年にリリースされた全曲盤の新譜は、僅か6点に留まった。しかも、その中で純粋新譜と呼べるのは僅かに3点のみである。他は、旧録音がCD化されたものである。しかも、こうした状況はDVDやブルーレイディスクの場合も、殆んど変わることがない。

これは、オペラというものに対する偏見、あるいは、とても間違った認識が原因となっているのかもしれないし、かつてのように、大きな資本を投じて一つのオペラの全曲盤を完成させる意欲や情熱を持つレーベルがなくなったと言えるのかもしれない。いずれにしても、オペラは危機的状況に立たされている。

そうした状況下、レコードアカデミー賞が決定された。大賞は、オペラ部門からバルトーク：歌劇《青ひげ公の城》全曲となった。小澤征爾指揮：サイトウ・キネン・オーケストラ、青ひげ公：マティアス・ゲルネ、他による演奏である。これは、2011年8月サイトウ・キネン・フェスティバルにおける演奏をライブ録音したものである。銀賞は、パーヴォ・ヤルヴィ指揮フランクフルト放送交響楽団によるニールセンの交響曲全集、そして、銅賞は、イアン・ボストリッジによる「シェイクスピア・ソングズ」となった。何れも、それぞれの部門を代表する名盤といえるものであろう。さらに、管弦楽部門ではヤルヴィ指揮NHK交響楽団によるR・シュトラウス：交響詩《ドン・キホーテ》、協奏曲部門ではコパチンスカヤのヴァイオリンによるチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲、室内楽部門では岡崎慶輔と伊藤恵によるベートーヴェン、サン＝サーンス、他によるヴァイオリン・ソナタ集、器楽部門では小菅優のベートーヴェンのピアノ・ソナタ第五巻、音楽史部門では渡邊順生によるフレスコバルディとフローベルガーのチェンバロ作品集、そして、現代曲部門では、作曲者は今から40年近くも前になくなってきているが、甲斐説宗（1938～1978）の音楽が選ばれた。

なお、小澤の演奏が大賞を受賞したのは、今回初めてのことであり、パーヴォ・ヤルヴィの指揮が認められたのも初めてのことであり、しかも、二つの部門に於いて同時に受賞するな

ど、一気にパーヴォ時代が到来したかのようである。この他、室内楽、器楽、音楽史の部門で日本人の演奏家が受賞に輝いた点なども特筆されよう。

また、アカデミー賞の特別部門において、ワーナー・クラシックスがリリースしている「ライジング・スターズ」シリーズが選ばれたが、これなどは、ある意味で現代においてももっとも必要とされている、クラシック界の明日のスターを発掘していく、とても大切なシリーズであると思われる。

また、これはオーディオのページで扱われるべき事項かもしれないが、アナログ・レコードが密かなブームとなっている状況がある。これまで、テンシュテット率いるロンドン・フィルの1984年来日公演や、1991年11月クーベリック率いるチェコ・フィルによるスメタナの「わが祖国」全曲盤など、貴重な演奏がレコード・リリースされてきたが、近年は、ラトル率いるベルリン・フィルも参加を始めた。これまでに、シューマンの交響曲全集などをリリースしてきたが、いよいよブラームスの交響曲全集までリリースされた。しかも、今回は、ワンポイント録音によるダイレクト・カッティングという従来の編集とマスタリングの過程を経ずにレコード化してしまうという大胆ともいえる手法によって制作されている。もちろん、この演奏はCDでは聴けないものである。ラトルとベルリン・フィルによる自信と確信を裏付けるブラームスが聴けると話題になっているところである。

いずれにしても、近年のレコード界は何らかの改革が講じられるべきである。思えば、フィリップス・レーベルがその活動を停止してすでに8年が経過しているし、EMI・レーベルもワーナー傘下となってすでに5年が経過しようとしている。こうした状況下、社会的な仕事を求めるというのは、非現実的な提案かもしれない。

しかし、EMIの昔のカタログを見ていると、1958年にアンドレ・クリュイタンス指揮ウィーン・フィルという豪華な顔ぶれで「交響曲へのお誘い」というとても立派なアルバムが作られている。ベートーヴェンの交響曲第五番の第一楽章に始まり、モーツァルトやドヴォルザーク、チャイコフスキーなどに飛び、交響曲の面白さを紹介するというものである。こうした試みを今からもう一度やろう、といった提案を私はするつもりはない。だが、交響曲というものを楽しむ人や奥深さを知らない人が多いのも事実であろう。そうしたことを考えたとき、こうした企画の大切さが浮き彫りになってくるように思われるのである。

なお、今年度も貴重な人材が失われた。作曲では、イギリスのピーター・マックスウェル・デイヴィス、フランスのピエール・ブレーズ、指揮者では、ニコラウス・アーノンクール、クルト・マズア、ネヴィル・マリナー、ロバート・クラフト、そしてスイスの世界的フルート奏者オーレル・ニコレ、さらに、わが国の世界的なピアニスト中村紘子といった方々の訃報が続いたのは、惜しまれて余りあることである。